

ACROSS 速報版

2019年11月26日 第95号

「中川小十郎の生涯～アジアで活躍した実業家としての側面を中心に～」

2019年11月23日立命館大学経営学部校友会第2回セミナー、懇親会が京都ガーデンパレスで開催されました。講師の立命館大学文学部日本近代史研究者である山崎有恒教授による「中川小十郎の生涯～アジアで活躍した実業家としての側面を中心に～」という表題のお話しでした。講演は立命館創始者中川小十郎先生の多面的な活躍をとりわけ台湾銀行時代を中心にお話いただきました。あっという間に時間が経ってしまいました。以下は講演の内容を簡潔にまとめました。



【講師 山崎 有恒 氏】

中川小十郎研究に至る道 私は立命館大学に赴任してすぐ岩井忠熊先生に喚ばれました。君は「くずし字」が読めるそうだから、新たに出てきた西園寺公望関係の史料を整理しなさいといわれ、十何年かけて史料集を作成し一息ついていたら、またも岩井先生に喚ばれ、今度は新たに出てきた中川小十

郎史料を整理しなさいと言われました。いま、その整理研究のさなかにあります。

中川小十郎、それは怪物の名にふさわしい人です。学校教育、実業、植民地官僚などその軌跡は多彩ですが、行き当たりばったりのようにも見えます。そこで本日はそのキャリアを貫いていた一つのキーワードに注目して、その生涯を理解していこうと思います。

西園寺と中川の名コンビによる学校創設 中川は大学卒業後、文部省に入省しました。そのとき新任大臣として西園寺公望が就任、二人は運命の再会を果たします。実は西園寺は維新期に山陰道鎮撫総督に任じられ、手勢を必要としていました。しかし彼はお公家さんでしたので、その配下に兵力を持っていませんでした。そこに協力を申し出たのが、亀岡の中川郷士でした。中川小十郎は中川郷士のリーダーの一族で、幼少期より西園寺と面会したことがありました。そんな二人が西園寺の文部大臣就任を機に再会、たちまち意気投合します。西園寺と中川、名コンビの誕生です。京都出身の二人は、明治30年、帝大（東大）以外の大学を日本に作ろうとして、京都大学をまず創りました。ところが、京都大学には西日本各地から優秀な志願者が殺到し、地元京都の若者は入りにくかったのです。大学で勉強したいという地元京都の社会的ニーズに応えなければなりません。そこで、京都法政学校を夜間の学校として創ったわけです。夜の6時から9時までの講義でした。しかもそれはお金のかからない学校でした。大学の最大の経費項目である人件費削減の方法を講じたのです。それは教員を雇わず、全部京都大学からの非常勤講師でまかなったわけです。京都大学創立の時に教授陣を集めたのが中川でしたから、

その中川に頼まれれば断れませんでした。こうして学費を抑えることができました。社会人になって働いている若者が低学費で学べるようにしました。しかも夜間の学校なので昼間遊んでいるキャンパスは附属中高として活用しました。

実業家としての稼ぎを立命に 中川は学校・教育だけではないキャリアをもっています。すなわち、実業家として、廣岡浅子の片腕として加島屋を立て直し、その後植民地官僚となります。最初樺太庁第一部長、すなわちナンバー2で実働部隊、陰の長官としての事実上のトップを務めます。次いで銀行家となります。すなわち台湾銀行副頭取、頭取となります。この間ずっと京都法政学校のバックアップをしています。官僚としての稼ぎを北（樺太）と南（台湾）から立命館につぎ込んだのです。



中川のキーワード・資源 中川に一貫して流れるキーワードがあります。それは資源です。中川はその大学時代に二つのことに興味を持っていたと伝えられています。ひとつは鉱山開発で産業立国をはかるといふものです。すなわち鉱産資源開発です。もうひとつは女性教育です。中川は当時の文部大臣懸賞論文で最優秀賞に輝き、言文一致体を推進し女性教育をしようとした。賞金400万円で女子のための啓蒙雑誌をつくったくらいです。これを人的資源の開発と考えたとき、中川のキーワードは「資源」ということになります。文部省に入省してからも、日本女子大学の設立に参加しました。

西園寺が文部大臣を辞めた時、中川も辞職し、実業界に身を投じることになりました。当時日本女子大学の設立を巡り懇意となっていた成瀬仁蔵に廣岡家加島屋への入社を直接依頼され合資会社加島銀行理事になります。廣岡浅子の申し出を受け、実業界入りし加島屋の再興に尽力することになりました。

そこでは、炭鉱の経営を立て直しました。鉱産資源ですね。その後、中川は樺太へ行きます。樺太時代の中川小十郎は中学を創設して世間を驚かせました。樺太ではまた石炭運搬鉄道などのインフラ整備を行いました。資源開発と教育の両方に尽力したと言えるでしょう。

私の台湾留学 次に彼は台湾銀行頭取となりますが、彼は何をやったのでしょうか。私は今年前期、台湾留学してきました。台湾では資料はすべて画像化されていました。ネット上でダウンロードできるのです。それを用いて中川さんの足跡を調べました。中川は資源の宝庫である南洋開発のハブとして台湾を機能させるという広い視野をもっていました。南洋には多くの手つかずの資源がありました。そこで台湾銀行が率先して金融を通じて開発をはかったのです。多くの子会社をつくり、台湾を南洋経営のためのプラットフォームにしようとしたのです。ただそれが不良債権化し、台湾銀行は事実上倒産しました。後日談として「大失敗だった」と言っています。でもそれは様々な条件に恵まれなかったからです。

台湾時代の中川小十郎 中川は西園寺公望との関係から立憲政友会の系列だと思われていました。そのため西園寺の辞任とともに文部省をやめることになるなど運命を左右されました。さすがに気の毒に思ったのか、西園寺公望は彼の人生に配慮し、それが台湾での仕事につながります。ただこの背景には西園寺公望の「配慮」もあったようにも負います。当時植民地は政党政治の影響が及ばないところでした。陸軍の勢力範囲でした。それだけに西園寺も総督府に人を送りこむのは難しい。そこで中川を台湾銀行へ向かわせたのです。いわば政党から送り込まれたくさびのような存在だったのです。そのため彼は佐久間台湾総督からは当初毛嫌いされました。中川副頭取就任歓迎の晩餐会へ行ってみると彼は末席におかれていました。中川は晩餐会を蹴って帰ってきた、そして謝らせたというエピソードがあります。こうして次第に総督府に仕事ができる男と認められ、協力体制が生まれていきました。中川は南洋経営に注力しました。台湾で亜熱帯の疑似体験をしつつ、金融と物流のコネクションを得て、周到な準備をさせてから南洋へ向かわせるのが、台湾銀行の

戦略でした。そのため 1919 年には華南銀行を作り、1920 年には南洋倉庫会社を設立しました。こうして金融と物流のシステムを整えます。『南洋倉庫株式会社十五年史』にそんなことが書いてあります。彼は台湾銀行を南洋経営のハブ化する意図をもっていました。



中川小十郎の「南進政策」 さて中川は同化主義（内地延長主義）ではだめだと考え、対外進出を優先する分化主義をとっていました。実は第七代総督明石元二郎も軍事的に同じ結論に達していたのです。当時第一次大戦で欧米勢力が後退し南洋はエアポケットとなっていました。いまこそ南洋に進出し日本の商圈にすべきだと考えました。そのため華僑と提携すべきだと考え、華南銀行を設立したので。さらに、台銀は総督府と組んで台湾拓殖株式会社の設立を準備しました。それは南洋開発のためでした。汽船、鉱山、電気、製造業、土地経営、プランテーション経営などをこの会社を通じて展開しようとしていました。ところがそれが実現寸前に明石総督が死去し、いったん立ち消えになりました。

田健次郎総督下の中川と台銀 1919 年第一次大戦後不況に見舞われます。まさに暗転です。同年三一独立事件が朝鮮で起こります。軍人による武力統治への反省の機運が高まり、台湾では初の文官総督として、第八代総督田健次郎が着任します。田は台湾における法制整備と文民統治の定着に尽力することになります。彼は内地延長主義を主張し、「内台一体」という方針の下に、内台の差別をなくす融合政策を行いました。当時積極財政の政友会と緊縮財政の民政党（憲政会）に割れていました。立憲政友会は積極財政主義をとりましたが、第二の道、すなわち野党の憲政会は、軍縮、欧米協調、軍事費削減、内地優先、安価な予算運営、福祉充実でした。最初

は中川と悪い関係ではなかった田健次郎は南洋より台湾島内開発へ主眼を置きました。その後任の内田も同じ道をとりました。しかし中川は積極財政路線をとり、田（内地延長主義）と対立しました。そこで、勸業銀行の台湾支店を設置してここに島内の経営は委ね、台湾銀行は為替を中心に南洋経営に集中しようとした。

憲政会内閣の誕生と台湾銀行 1923 年関東大震災により政友会内閣から憲政会内閣に変わります。憲政会内閣は緊縮財政を徹底し、対外膨張政策を抑え込みました。政友会はこれを批判し、台湾に南洋経営の強力な基礎を築くべしと主張しましたが、憲政会内閣は、内田を更迭しました。内田の次の総督伊澤が中川を潰すために送りこまれてきました。中川は苦境に陥ることになります。そんな中、低利融資を受けていた南洋資源開発のための石原鉦業が経営危機に陥り、中川は辞表を提出します。その後台湾銀行も経営破綻に陥り、金融危機が起こります。中川はまさに世の中の変動に翻弄されたといえるでしょう。政変と景気変動に翻弄されました。

その後の中川 中川は田中義一内閣実現に奔走しました。対外的積極政策を考え、南洋への雄飛を考えました。資源問題に注力し、外地にこそ危機を打開する鍵ありと考えました。南洋を掌中に収めて資源を開発しようと考えていました。だが、かないませんでした。台湾時代の中川の南洋開発が軌道に乗っていれば、日本が数十年後に南洋資源を求めて南方へ進出し、欧米列強との対立、ひいては太平洋戦争に突入するという道を回避することもできたのではないのでしょうか。



おわりに 南洋への雄飛を夢見た中川小十郎でしたが、時代に翻弄され、その夢を失って、人材を育てる事へと向かいました。そこで立命館大学で人的資源の開発に力を注ぐことになりました。国家に有用な人材を育てるという中川の思いは立命館大学で実行され、立命生に雑草のように生き抜いてほしいと

考えました。また、中川のおかげで立命館大学と台湾との絆も深いものとなりました。

紙幅の都合でカットしなければならなかったことが沢山あります。また質疑応答でのお話もストーリーの中に入れ込みました。ご寛恕下さい。（松村）

【立命館大学経営学部校友会】

〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町 2-150

TEL:072-665-2090 FAX:072-665-2099

E-mail: info@ritsba-kouyukai.jp